

「非誠勿擾」(特集 途上国のエンターテイメント事情)

著者	丁 可
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	203
ページ	4-5
発行年	2012-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045822

「非誠勿擾」

丁 可

中国江蘇省テレビ局の衛星放送で、「非誠勿擾」（誠意がなければお断り）という超人気番組があります。調査会社の索福瑞が行った七一都市への調査によると、「非誠勿擾」はCCTV（日本のNHKに相当）の「新聞聯播」という夜七時からのニュース番組に次いで、他すべての衛星放送番組を凌ぐ高い視聴率を持っているとされます。

「非誠勿擾」は、日本の視聴者にもなじみのある『Take Me Out』（テイク・ミー・アウト）という豪州発で、TBSでも放送されたことのある恋愛バラエティ番組の中国版です。番組には、毎回二四名の女性ゲストがお見合いにやってきました。「愛の初体験」、「愛の再判断」、「愛の最終選択」という三つのステージを通じて、男性ゲストへの理解を深めていき

ます。この間、女性はテーブルの上のランプを点灯しながら「男性は結婚相手としてふさわしい」という意思表示をしていきます。ランプが消されたら「ふさわしくない」ということになります。ファイナルステージで、会場にランプを点灯させた女性が一人のみ残った場合に、司会者は男性の意見を伺いながらカップル成立の可否が決められます。女性側のランプがすべて消されたら、男性は残念ながら退場をしなければなりません。もしファイナルステージでも複数の女性がランプを点灯しつづけていれば、男性はこれらの女性に質問をし、最も気に入った女性を選ぶことができます。

「非誠勿擾」の人気ぶりはその放送方法から見て取れます。毎週土曜日と日曜日の夜のゴールデンタイムに、番組は二回放送されま

す。しかも、夜九時一〇分に一度放送された番組が終了直後に、即ち再放送、さらに後日、昼間にも何回か再放送、という常軌を逸した放送方法が採用されています。

「非誠勿擾」の高い人気につながった理由としてはまず、番組の出演ゲストがきわめて幅広い面から選出されており、「優秀な人材」が常に確保されている、という点を指摘しておきたいです。「非誠勿擾」は北京、上海、広州、大連、成都の五カ所で毎週、オーディションを行っています。海外に数千万単位の華人が生活しています。彼らも番組に参加できます。現に、アメリカ、イギリス、フランスなどから応募した男女ゲストを中心に、それぞれスペシャル番組も組まれていました。さらに、外国人にも参加資格が与えられています。たとえば、中国のネット

で「佐藤愛」というキーワードで検索したら、「非誠勿擾」と関連する多数の報道が出てきます。上海在住で、夫を交通事故でなくし、息子を女手ひとつで育てていたこの日本人のシングルマザーは、番組に出演することで、中国の視聴者から最も注目される日本人女性の一人になりました。彼女は気に入った男性がいれば、たとえ断られることが分かり切った場合でも、周りから嘲笑あざわらわれることを承知のうえでも、いつもランプを最後まで点灯し続け、自分の純粹な気持ちを打ち明けようとしています。そして、「中国人男性は料理させられて可哀そう、私だったら、未来の旦那様に一切の家事をさせない」とのことをいつも口にしており、家事を奥さんと分担しながらやっている中国人男性から憧れられる存在となりました。

「非誠勿擾」の出演者はモデルさんから会社の社長、大学教授、会社員、出稼ぎ労働者など、広範な社会階層に及んでいます。また、出演者が時々ベアとして登場することもその魅力のひとつです。これまで双子姉妹が番組に同時に登場したケースが少なくとも六組ありました。また、シングルマザー

とその娘さんという仰天コンビも二組ありました。ちなみに、親子コンビの場合は、互いに適切な男性を推薦し合うケースが多かったらしいです。

「非誠勿擾」は参加者の選別に際して、テレビだけでなく新興メディアとも積極的に連携しています。「百合ネット」と「珍愛ネット」という中国の二大出会い系サイトに登録した応募者は、「非誠勿擾」で優先的に採用されます。その一方で、携帯電話が活用されており、番組への応募は、携帯メールひとつで簡単に対応できる仕組みになっています。

儒教の伝統がある中国では、男女がお見合いをする際に、自己アピールを控え目に行うことが一般的です。しかし、この番組では違います。女性出演者の大多数は「八〇後」とよばれる一九八〇年以降の一人っ子政策の時代に生まれた女の子です。彼女たちは自己表現欲がとにかく強いのです。ハイヒールにミニスカート、場合によってはナース服やその他のコスプレなど、女の子としての可愛らしささえ表現できれば、なんでも着こなす勇気があります。相手と話をする際も、个性的でストレートな発

言が多いです。「マッチョな男が好き」、「一重まぶたの男が気に入っちゃう」、「お尻の形で相手を判断したいわ」というように、中国にしては、かなり露骨な話し方をしています。ただ、視聴者としては、どちらかといえばエロさよりも可愛らしさのほうを感じることも多く、これもこの番組の面白さのひとつと言えるでしょう。

「非誠勿擾」は時々敏感な話題にあえて触れます。例えば、中国では農村出身者や出稼ぎ労働者に対して、差別的とはいえないまでも若干、見下す傾向があります。そこで、某男性出演者の母親は、「嫁は農村出身者であつてはならない。毎日のように親戚が家を訪れてくるから、本当に面倒くさいわ」と発言してしまいます。中国社会の拝金主義の風潮もこの番組で如実に体现しています。某北京出身のモデルさんは、自転車で彼女を乗せて、いっしょに遠足に出たいという男性ゲストの告白に対して、「自転車に乗って笑つてい

るぐらいなら、BMWで泣きたいわ」と言つてしまい、ネットで「拝金女」と呼ばれることになりました。もう一人の女性は、その容姿の割に、さらに「理想的な男性は

少なくとも月収が二〇万元（約二四〇万円）を超えていなければならぬ」とまで露骨に宣言していました。

このような話題性は番組に高い視聴率をもたらしたとともに、中国の世論から批判を招くことにもなりました。二〇一〇年、某女性出演者に酷似したヌード写真がなぜかインターネットに漏れいしてしまいました。このことがきっかけで、中国政府管轄のCCTVは名指しで「非誠勿擾」はじめ中国の恋愛バラエティ番組に対して批判を繰り返してまいりました。六月九日、国家広電総局は正式に「広電総局の恋愛バラエティ番組のさらなる規範化についての管理通知」を出しました。「恋愛の名目で参加者に対して侮辱的な発言や人身攻撃を行ったり、ひいては低俗的で性に関する内容に触れたり、拝金主義など不健全で不正確な恋愛観を宣伝してはいけない」と明確な指示を出しました。その後、「非誠勿擾」の番組内容は大幅に調整されました。出演ゲストの話題や容姿や表現力、職業、価値観などに関して基準が定められ、さらに、江蘇省共産党学校の女性教授が新たに番組のコメンテーターとして

招かれました。

「非誠勿擾」の人気の高さを理解するためには、詰まるところ、現代中国の人口構造を認識しなければなりません。中国では、一人っ子政策の影響もあつて、男女比が一八・一〇〇（二〇一二年時点で世界の平均水準は一〇三から一〇七）というきわめて歪んだ構造になっています。二〇二〇年になると、三〇〇〇万人の独身男性が生涯結婚できない危険性があると指摘されています。中国社会では、すでに女の子は「招商銀行」（家に富をもたらしてくれる存在の喻え）、男の子は建設銀行（もっぱら他人に貢ぐ存在の喻え）という言葉の方が流行っています。このような男女人口数のアンバランスが存在していればこそ、女性が辛辣なコメントや刺激的な発言を繰り返しながら男性を主導していく「非誠勿擾」が、絶大な人気を博すまでになつていったといえるでしょう。

（てい）か/アジア経済研究所 東アジア研究グループ